

私学助成署名推進ニュース

発行：全国私学助成をすすめる会（事務局：全国私教連）
No.12 2025年7月16日（水）

N 私学助成署名 NEWS すすめる会/推進会議

〒650-0023
神戸市中央区栄町通3丁目6-7 大栄ビル10F 兵庫労連内
兵庫県私学助成運動推進会議／兵庫私学助成をすすめる会
Tel 078-333-0305 Fax 078-333-0510
E-mail: h-skr@circus.ocn.ne.jp

私学助成をすすめる会 近畿ブロック交流集会を開催しました

2025年7月13日に兵庫県（神戸学院大学）で開催された近畿ブロック私学助成を進める会交流集会には、京都・滋賀・大阪・兵庫の4府県から計95人（19学園）が参加しました。

『高等学校の授業料無償化』の展望と全国情勢

全国私学助成をすすめる会共同代表の山口直之様にご講演いただきました。まず「学校教育を成立させる条件」である教員や設備を支えるには公費が重要であり、公立と私立で支援額に大きな差がある現状が報告されました。例えば、公立高校生には年間112万円の公費が支出されていますが、兵庫県の私立高校生には36万円しか支給されず、差額は保護者が負担しています。また「高校無償化」と言われていても、対象は授業料のみであり、施設費などは自己負担のままです。都道府県によって補助の内容にも差があり、東京では全額補助されるのに対し、和歌山県ではほとんど支援がありません。こうした自治体間格差や教育への公費割合の低さ（日本はOECD平均よりも下位）から、講演では「公立と私立の対立ではなく、国全体として教育への投資を増やすべき」と訴えられました。過去には助成削減の動きに対して、全国の高校生・保護者・教職員がパレードや署名で制度を動かしてきた歴史も紹介されました。最後に紹介された福井県の高校生の「公立も私立も手を取り合い未来の教育を考えよう」という言葉が、参加者の心に深く響きました。



〈参加者の声〉

- ・生徒一人あたりの税投入金額的の私立公立の違いによる不公平を是正してほしい。（京都・保護者）
- ・まだまだ道半ば、ここからも頑張る。（滋賀・教員）

戦後80年企画 『ヨシコが燃えた』



詩人で元高校教員の高藤匡子さんをお迎えし、戦後80年を考える講演が行われました。高藤さんは6歳のときに神戸空襲に遭い、家を失って母方の実家のある姫路へ疎開しましたが、そこでも空襲に見舞われました。お産を控えた母と担架で運ぶ父とは別れ、祖母と3歳の妹・ヨシコさんと逃げ中、降り注ぐ焼夷弾によりヨシコさんは火傷を負い、数日後に亡くなりました。講演では、自身の詩集『ヨシコが燃えた』から詩を朗読し、「何も悪くないヨシコが、なぜ死ななければならなかったのか」と問いかけました。ヨシコさんは飴玉一つ食べたこともないまま亡くなり、その亡骸を白い布で包み、自転車の荷台に乗せて運んだという当時の状況も語られました。戦争体験者が少なくなる今、高藤さんは「原体験者」から「追体験者」へと記憶をつなぐことの大切さを強調。体験がなくても、記録や文学を通して想像力を働かせ、戦争の記憶を語り継いでいってほしいと呼びかけました。また、「平和とは何か」を他人事ではなく自分事として考えることの重要性を、高校生をはじめとした若い世代に訴えました。

〈参加者の声〉

- ・自分事、責任、追体験者というキーワードから、教育に携わる人間が、「戦争に備えるのではなく、戦争を絶対に起こさないための備え」を進めていく必要を感じました。（滋賀・教員）
- ・戦争がないからこそ、想像力を大切にしながら、いかに平和を自分事として考えられるか、考えていく機会をもうけられるかが大切だと考えました。（京都・教員）



阪神淡路大震災から30年のいま思うこと



神戸市長田区の大正筋商店街で日本茶専門店を営む伊藤正和さんをお迎えし、阪神淡路大震災の体験と復興の歩み、防災への思いを語っていただきました。伊藤さんは「まさか神戸にあんな大きな地震が起きるとは誰も思わなかった」と、1995年の震災当時の気持ちと様子を振り返り、準備がいかに大切かを強調。ご自身は東北の被災地にも30回近く足を運び、被災者や支援者に「人の心に種をまく」という思いを伝えてこられました。ご家族の話として、家が全壊したにも関わらず避難所に行かず、思い出の詰まった自宅前に座り続けていた父親との日々のやりとりが紹介されました。当時は理解できなかった父の気持ちが、77歳になった今では「誰かと話したかったのだ」と分かるようになったと語られました。

また講演では、「知っている人と知らない人が同時に助けを求めてきたら、どちらを助けるか？」という問いを投げかけられました。迷っている間に両方助けられないかもしれない。だからこそ、判断力・決断力、そして何より日頃からの人とのつながりが重要だと強く訴えられました。震災からの復興は10年、神戸全体では30年かかったと語り、若い世代に「平和とは何か」を日々問い続けることの大切さを伝えました。商店街には震災復興を支えてくれた人たちの手形が飾られており、「ロボットではなく、人が人を助ける」ことの大切さを、これからの世代にも語り継ぎたいと締めくくられました。

〈参加者の声〉

- ・自然災害によって被災された方々は、誰も責めることができない中で、心の力がなくなっていく。けれども、誰かがそのような人々の心に種を蒔く。その誰かになるには、やっぱり利他の精神が必要だと感じました。生徒に伝えていくべき大切なことだと思います。（滋賀・教員）

昨年に続き、近畿ブロック高校生交流会を開催

午後の高校生交流会には、京都・滋賀・大阪・兵庫の6学園から高校生31人と教職員14名が参加しました。京都の生徒は、7月5日に実施した「京都・宇治戦跡ツアー」で学んだことや気づいたことをレポートし、兵庫の生徒は、94歳の曾祖母が体験した戦争の記憶や、満州からの引き揚げ時に男性に扮して命からがら帰国した友人の話を紹介しました。その後、参加者は「私学助成」「戦後80年」「阪神淡路大震災から30年」に加え、「校則問題」も加えた4つテーマのグループに分かれ、意見を交わしました。それぞれが、自分の暮らす社会や学校の課題を自分ごととして捉え、活発な話し合いが行われました。

大阪ではしばらく高校生による自主的な活動が組織されていませんでしたが、今年5月、愛知県で行われた全国高校生交流会・全国サミットに1人の女子生徒が参加。その生徒の想いは学校の仲間たちに伝わり、今回なんと14名の生徒が参加してくれました。一人の想いが誰かに届いたとき、それはやがて大きな力となる——そのことを実感させられる出来事でした。

最後に、愛知県の高校生を中心に全国の高校生で取り組む「戦後80年企画・80万羽折り鶴プロジェクト」が紹介され、平和への願いを込めて、自らの手で、仲間と一緒に鶴を折る取り組みがスタートしました。交流会は、「他人事ではなく、自分事として考えること」の大切さを全員で確認し合い、締めくくられました。

